魔法使いアルル⑤

羽織かのん・作
kaworu・絵

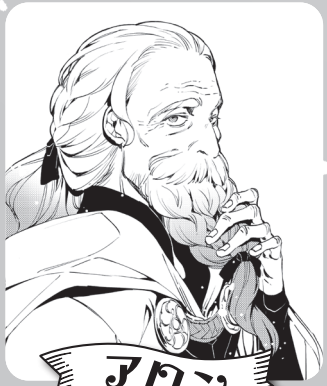
アルファポリスきずな文庫

もくじ

プロローグ……6
第一章　新たな冒険　氷の王国……8
第二章　穴の奥を探索……56
第三章　ヤドリギの少女……144
第四章　漆黒の王座……216
あとがき……256

Contents

登場人物 Character



アロン

アルルの優しい育てのお父さん。ホープ王国の偉大なる魔法使いで、みんなの憧れの存在。

レレナ

氷の魔法が得意な黒い魔法使い。実は氷の王国の王女だった？

オロチ

黒い魔法使い。幻影の魔法が得意。実は、いつもは違う姿をしていて……!?

ノア

黒い魔法使い。炎の魔法が得意。アルルとレオを黒い魔法使いの王にしようと企む。

レオ

ホープ王国の第二王子。アルルの親友で、同じ黒い杖に選ばれた魔法使い。

アルル

心優しい女の子。実は黒い杖に選ばれた魔法使い。かつて両親に捨てられいじめられていたが、今は仲間に囲まれてとっても幸せ。

プロローグ

魔法のある世界がこんなに素敵だなんて、昔の私だったら知らなかっただろうな。
私の名前はアルル。
私は偉大なる大魔法使いのアロンお父さんと、ウサギの姿をしたお母さんのような執事のサリー、そして友達のレオとルビーと一緒に暮らしているんだ。
レオは、私の住むホープ王国の王子様。私と同じ黒い杖に選ばれた魔法使いで、お父さんの元で魔法使いとして修行中。
ルビーは、姿なきものっていう不思議な存在で、夢の中を渡ったりできるんだ。今は執事見習いとして頑張っているよ。
私たちは、これまでたくさん冒険してきたんだ。
魔女を倒したり、人狼の親子を助けたり。ほかにも、不思議な森の闇をはらって救ったり、魔法学園では事件を解決したりしたこともある。
少し前には、魔術師の王国に行って、王子であるキースと共に、悪魔の真実を知った。

悪魔って恐ろしい存在かなと思っていたのだけれど、それだけではなかったんだ。
ちゃんと人と同じように心があって、そして悪魔ともちゃんと心を通わせることができる。相手を分かろうとすれば、ちゃんと向きあえる。私はそれを学ぶことができた。
そして、その事件を解決して以来、キースとは友達になったんだ。
最近では時間があると私の家によく遊びに来るようになった。友達が増えるって素敵なことだね。でもキースが来ると、レオとルビーがやきもちをやくんだ。
ふふふ。友達同士だけどさ、その気持ちは分かるんだよね。私もレオやルビーがキースとばかり遊んでたら、やきもちやいちゃうもん。
たくさん大変なことはあったけれど、そのたびに手を取りあって乗り越えてきた。
出会いがあれば、別れもある。
けれど、そのたびに私は心が強くなっていっている気がする。
そして、今日もまた、冒険が始まっていく。
皆と一緒なら大丈夫。
私はそう信じているんだ。

第一章　新たな冒険　氷の王国

「ちょっと、つめてよ。キース」
「レオ。俺けっこうつめてるんだけど」
私たちはぎゅうぎゅうづめになりながら草かげに隠れていた。
キース、レオ、私、ルビーの順番で並んでいるのだけれど、ちょっと狭い。
「っていうかさぁ、キースは、最近うちに来すぎじゃない？　ちゃんと連絡くれなきゃ、お菓子を作る量が変わるから困るんだよ」
ルビーが唇を尖らせると、キースが笑って答える。
「ごめんごめん。だって、暇があると、遊びたいなぁって思っちゃうんだ」
キースと一緒に魔術の国の事件を解決してからもう、一月ほどがたった。
こんなに仲良くなれるだなんて、最初出会った時には思ってもみなかった。
今では大の仲良しで、時間があるといつも遊びに来ている。
「でも、大丈夫なの？」

「うん。大丈夫。俺たちの国も今けっこう変わってきていてさ。悪魔たちとも仲良く過ごすことができているよ」
「そうなんだ。良かったね」
「うん。皆のおかげだよ」
私たちは笑いあい、それから双眼鏡を構える。
その先には、部屋で仕事をしているアロンお父さんがいる。
「仕事中だね……どうする？」
そう私が尋ねると、レオが腕を組んでつぶやく。
「やっぱり仕事の邪魔をするのはいけないんじゃないかな？」
真面目に注意をされて、ルビーは肩をすくめた。
「でも、せっかくのいたずらだよ？　絶対に面白いのに」
すると双眼鏡をまだのぞき込んでいたキースが何かに気づいたように口を開く。
「あ！　あれ、仕事してないぞ！　見てみろ！」
「「え？」」
私たちはもう一度双眼鏡をのぞき込む。

「ほら！　仕事の本の内側に、別の本を仕込んでいる！」
「「あ！」」
「しかもこっそりクッキーも食べている！」
「「ずるい！」」
その様子に、私は心を決める。
「仕事してないなら、いたずらしてもいいよね」
レオとルビーとキースがうなずいて、そして私たちは悪い笑みを浮かべた。
「よし、行きましょう」
「「了解！」」
背筋を伸ばして、私たちはお父さんがいる部屋の扉をノックして、笑顔で中へと入った。
「お父さん。ちょっと時間いい？」
ふふふ。きっとお父さん驚くだろうな。
わくわくしていると、お父さんが書類を見ていた手を止め、にっと笑って立ち上がった。
「仕方ないのぉ。さて、何をさせるつもりかの」
ピンクのリボンで結んだあごひげをなでながら、そうお父さんがつぶやく。

そんなお父さんの手を私は引っ張った。
「案内するから、目を閉じて！」
「あ、アルル。僕が目隠しの魔法をかけるよ」
レオの言葉を聞いて、お父さんが笑い声を立てた。
「ほっほっほ。手がこんでいるのぉ」
「いいからいいから」
お菓子の準備をしていたサリーが、私たちに向かって優しく声をかける。
「もうすぐ、にんじんケーキが焼きあがりますから、それまでには終わらせてくださいね」
それに私たちは元気いっぱいに返事をする。
「「「はーい！」」」
今日はにんじんケーキ！　にんじんケーキ大好きだから、嬉しいなぁ。
私は早く食べたくなって少しお腹を押さえた。
するとレオとルビーとキースも同じようにお腹を押さえていて、笑ってしまう。
終わったら、美味しいにんじんケーキだ！

「それで、どうしたんじゃ？」
私たちはお父さんを庭へと案内して、大きな木に作られたブランコに座ってほしいとお願いする。
「ちょっと座ってみて」
お父さんはちらりとブランコを見て、それから周囲を見まわす。
「ふむ？　乗ればいいのか？」
「「「うん！」」」
ニヤニヤする私たちに首をかしげながらもお父さんはブランコに乗った。
「「「押すね！」」」
「あぁ」
ブランコを押した瞬間、木が一気に成長して伸び始めた。同時にブランコが高く上がっていく。
お父さんがそれに驚きの声をあげた。
「おおおおおおおおおおおお!?」
ブランコには動く魔法をかけてあるので、勢いよく揺れている。

「おおおおお！　なんと！　景色がいいのぉ！」
お父さんを見上げながら、私たちは叫んだ。
「「「下を見て見てー」」」
「ん？　おお！　なんと！　下が海のようになっておる！」
お父さんはとっても楽しそう。
あまりびっくりはしていないようだけれど、まあいいかと私は肩をすくめた。
「すごいのぉ！　幻影の魔法と植物の生長魔法と、それを継続する魔法を組み込んであるのか！　なかなか面白い！」
「そうでしょう！　お父さんのために作ったの！」
「先生！　楽しんでください！」
「じゃあ、僕たちはサリーのにんじんケーキを食べてくるね！」
「行ってきまーす！」
さっきサリーに聞いてから、もうお腹がにんじんケーキを求めている。
私たちが屋敷の中に戻ろうとすると、お父さんが慌てて言う。
「ちょっと待ってくれ！　降り方は!?」

私は魔法の杖をひょいと動かした。
「魔法よ消えろ」
次の瞬間、木は元の大きさへと戻り、ブランコも止まった。
お父さんはほっとした様子でブランコから降りると、よろよろとしながらつぶやいた。
「末恐ろしい子どもたちだな」
「ごめんごめん。でも、本当はもっと驚いてほしかったけどな」
私がそう言うと、お父さんは笑い声をあげる。
「はっはっは。わしは龍をブランコにしたこともある。あの程度では驚かんよ」
「「「龍を!?」」」
驚く私たちに、お父さんはにやりと笑う。
「まだまだじゃのぉ。ほっほっほ！」
さすがはお父さんだなと思いながらも、私の頭の中はもうサリーの手作りにんじんケーキでいっぱいだった。
お腹がすいた。早く食べたい。
それは皆も一緒だったのだろう。いつもよりも足早に廊下を歩いて、サリーの元へと向かう。
廊下にはすでに美味しそうなにんじんケーキの香りが広がっていた。
いつも皆でお菓子を食べる広い客間の部屋に入ると、テーブルの上にすでににんじんケーキが準備されていた。紅茶もいれられており、カップから湯気が立っている。
「わぁ！　おいしそう！　サリー！　今日もとってもいい香りね」
席にさっと座って、サリーが食べてもいいよと声をかけてくれるのを待つ。
すると、サリーはにんじんケーキの上に甘いクリームをたっぷりとかけてくれた。
「どうぞ、召し上がれ」
「「「いただきまーす！」」」
「はっはっは。食い意地が張っておるの。はて、サリー。わしのケーキにはクリームはのせてくれないのか？」
お父さんの言葉に、サリーはクスクスと笑いながらケーキにクリームをのせた。

私たちはサリーがいなくなったら生きていけないな。
甘くて美味しいにんじんケーキを口いっぱいに頬ばりながら、私はそう思ったのだった。

ケーキはおかわりもあったので、私は三つも平らげてしまった。
「お腹いっぱい」
そうつぶやくと、私以上に食べていたルビーとレオとキースも、お腹をさすりながらうなずいた。
「美味しすぎたね。よし！　僕はサリーのお手伝いしてくるね！」
ルビーはそう言うと、後片付けの手伝いに走っていった。
私たちは、テーブルの上の皿を片付けていく。
その時だった。
部屋の中が突然寒くなり、床に氷が張り始める。そして天井には氷柱が現れ、雪がひらひらと降ってきた。
「これは何？」
私が雪の結晶に触れると、とても冷たい。

吐く息が白くなり、私はお父さんの方へと視線を向けた。
「氷の王国からの手紙じゃ」
「「え？」」
お父さんの目の前に、氷の蝶がひらひらと飛んでくる。
光を反射してとても綺麗だけれど、部屋の気温がどんどんと下がっていくのが分かる。
「うううう。寒い！」
「本当だね。アルル、これを着て」
「レオいいの？　ありがとう」
レオが私に上着を貸してくれて、私はそれを羽織る。
するとキースがにやりと笑って声をあげた。
「あーあ！　上着、いいなぁ」
私は慌ててレオから借りた上着を脱いで、キースに渡した。
「ごめんごめん！　キースも寒いよね。レオ、

これキースに貸してもいい？」
私がそう言うと、キースとレオが動きを止める。
あれ、何かおかしなこと言ったかな……？
キースは首を横に振って苦笑いを浮かべた。
「ごめん。なんでもないよ。アルルが着ていて」
「いいの？」
「うん。レオ、そんなににらむなって」
「にらんでないさ。ほらアルル、風邪ひかないようにね」
「う、うん。ありがとうレオ。キースごめんね」
そんなやりとりをしている間に、お父さんは蝶の翅に書かれていた手紙の文面を読み終え、顔を上げた。
「氷の王国からの手紙じゃな」
「氷の王国？　お父さん、それってどこにあるの？」
「北の果て、流氷の先じゃな」
「……場所分かんないや」

私が首をかしげると、お父さんが私の頭をぽんぽんとなでる。
「はっはっは。まぁ、行ってみたら分かるさ」
「どんな国なの？」
「真っ白じゃな。すべてが凍り付く世界じゃ。そこに住まう人間を見たら驚くじゃろうな。まぁ、行ってみてのお楽しみじゃ」
「へぇ。楽しみだな」
「何か、助けてほしいことがあるそうだ。さて、アルル、レオ、問題を解決に行こうかの」
「「はい！」」
私とレオが元気よく返事をすると、一緒には行けないキースは残念そうにため息をつく。
「魔法使いは忙しいな。帰ってきたらまた遊ぼうな」
私はうなずくと、キースに笑顔を向けた。
「すぐに帰ってくるからね」
「あぁ」
お父さんが杖を振ると、一瞬で部屋の氷は解け、氷の蝶も姿を消した。

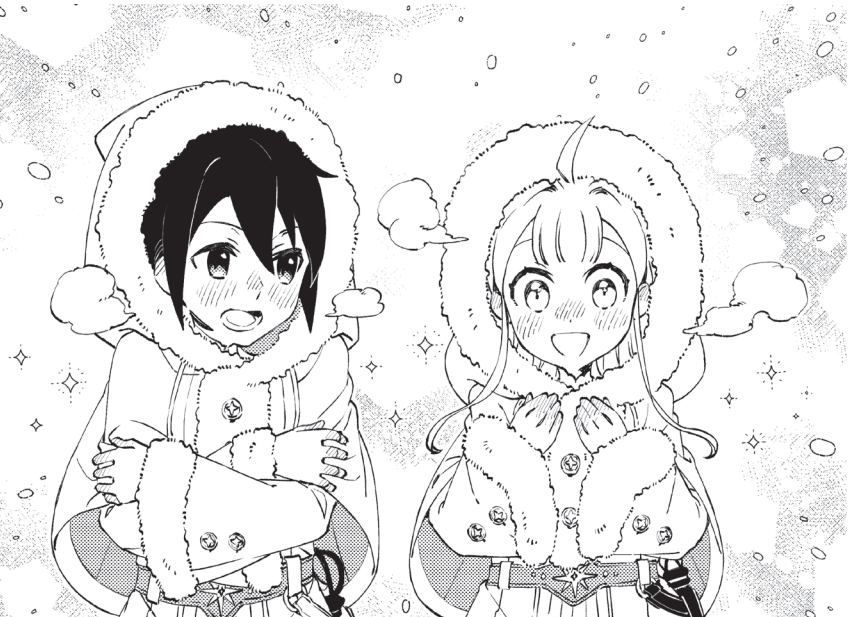
先ほどまで寒かった部屋が暖かく戻り、私はほっとする。
髪の毛までカチンコチンに凍っちゃうかと思った。
「わしゃ、下調べに行ってくる。二人も旅の支度を済ませておくように。よいな」
「「はい！」」
「よし、では、また後で」
そう言うとお父さんは杖を振ってその場から消えた。
「それじゃあ俺も国に帰るよ。気を付けて、行ってらっしゃい」
「うん！　行ってきます。キースまたね」
「またな」
挨拶を済ませた私とレオは、まず図書館へと向かうことにした。
お父さんが帰ってくるまでに、氷の王国についてできる限り学んでおかなきゃ。
それに旅の準備も終わらせなければいけない。
これから大忙しだ。
「アルル、行こう！」
「うん！」

私はレオと手を繋いで廊下を駆ける。
やることはたくさんあるけれど、こういう時は、できることをしっかりと行うことが重要だ。
焦ったらいけない。
私とレオは、今できることをするべく動き出したのだった。

その後、私とレオ、お父さんの三人で氷の王国へと向かうことになり、サリーとルビーは屋敷で待つことになった。
荷物はお父さんが魔法で小さくしてくれた。
氷の王国まではどうやって行くんだろう？
お父さんに聞いたら、特別な道を使わないといけないと教えてくれた。
特別な道？　それってどこにあるのかな。
そう思っている私たちを、お父さんはある場所へと連れていく。
それは、マダムレディのお店。
マダムレディは、一つ目のつややかな紫色の唇を持つ女性。

マダムレディが歌うと地面からツルが伸びてきて、行きたい場所への扉が開くんだ。
お父さんの娘として初めて一緒に買い物に出かけた日も、こうやってマダムレディのお店を訪れた。
「お父さん、なんだか懐かしいね」
「あぁ。本当に」
マダムレディの扉を通ってショッピングモールに連れていってもらった時は、本当に嬉しかったな。
こんな不思議で素敵な世界があるなんて知らなくて。
お父さんと初めて一緒に出かけたあの日は、私にとってとても大切な思い出だ。
お店へと入ると、すぐにマダムレディがこちらに気づいて笑みを浮かべた。
「あらあら、お久しぶりじゃない」
お父さんはうなずくと、マダムレディに向かって尋ねた。
「仕事が忙しくてな。景気はどうだい？」
「ふふふ。まぁ、悪くはないわ。それで、今日はどこへ行きたいの？」
「氷の王国じゃ。行けるか？」

「もちろん。じゃあ、行くわよ」
私が慌てて耳をふさぐと、レオも私の真似をして両耳をふさいだ。
次の瞬間、耳をつんざくような歌声が響き渡る。地面からはツルが伸び、氷の扉が現れた。
「行ってらっしゃい」
ひらひらと手を振るマダムレディに見送られて氷の扉をくぐると、肌に痛みが走るほどの冷たさに包まれる。
「ふわぁぁぁ！　寒い寒い！」
「凍えちゃう！　お父さん！　寒いよ！」
「ほっほっほ。寒いのぉ！」
息が真っ白だ。
ふぅーと吐いてみると怪獣みたい！



お父さんが杖を振ると、私たちの洋服は一瞬で冬服に変わった。多分服に魔法がかけられているのだろう。とても暖かい。
「ふわぁぁ。良かった。レオ大丈夫だった？」
「大丈夫。でも、指がまだ冷たいよ」
「うん！　鼻が痛い」
私たちが凍えないように手をすりあわせていると、お父さんが少し先にある城門を指さした。
「ほら、あそこが氷の王国の入り口だ。行くぞ」
「「はい！」」
私たちはお父さんの後ろからついていくけれど、雪が降り積もっており、歩くのも大変だ。
「うぅ。雪に埋もれるよ。アルル、手を繋いでいこう」
「うん。というか、お父さん！　ほうき使っちゃだめなの？」
お父さんは白い息を吐きながら髭をなで、説明する。
「ここの雪は特殊だ。ほうきで飛べば肌が凍り付いてしまう。まぁ、魔法で防ぐこともできなくはないが、歩いていった方が魔力の温存にもなるわい」
その言葉に私とレオはため息をつきつつ、手を繋いで歩き始めた。
寒い。
服は暖かいけれど、それでもやはり寒い。
「ここが氷の王国かぁ」
見上げると、そこには氷の城門がある。その先には大きな城と塔が見えた。
「綺麗……光を反射して、いろいろな色に輝いて見えるのね」
「そうだろう。世界で最も美しい城とも呼ばれているのじゃ。夜になると空にオーロラも見えるぞ」
「オーロラ！」
「楽しみだね！」
少しばかり気持ちが明るくなる。
不思議なことに、城門前へと着くと、地面にあった雪は消えた。地面には氷の文様が描かれたタイルがはられている。
「この文様が結界のような役割を果たしている。故に、氷の王国内には雪は降り積もらな

いのじゃ。ただし、寒いのは寒い！」
お父さんの言葉に、なるほどなと思う。
たしかに鼻と耳は痛いし、寒くて手がかじかむ。
お父さんが城門前にいる門番と話をすると、すぐに中へと案内してもらえた。
そして、門番の案内で王城へ向かって歩いていく。
門の中に入って私はびっくりした。
すごく寒いのに、門の中で暮らしている人々は皆、薄着だった。そして肌の色も白く、銀色の髪がとても綺麗だ。
「うわぁ。皆、薄着だ」
「本当だね。アルル、ちゃんと氷の王国について調べておいて良かったね」
「うん」
図書館で調べたところ、氷の王国の人々は寒さに強く暑さに弱いらしい。
私たちとは体質的に違うようだ。
「それに綺麗な人が多いねぇ」
「身長も高くてすらっとしているね」

「うん。そうだね……」
それを見つめながら、何かが頭をよぎる。
以前どこかで氷の王国の人に会ったような気がするんだけど……
そこでハッと気づいた。
「氷結の……レレナ」
小さな声でそうつぶやいた時、周囲にいた人々が動きを止めて、こちらを見てきた。
その瞳はとても冷たくて、私は驚いて足を止めてしまう。
すると、お父さんが咳払いした。
「アルル、行こう」
「う……うん」
私はお父さんの横に並んで歩き始める。
視線が私を追いかけてきているようで、なんだか怖い。心臓がバクバクする。
そんな私の手を、レオがぎゅっと握った。
「大丈夫だよ。止まらずに行こう」
「うん」

どこかぴりぴりとした空気を感じながらも進んでいく。
氷の城の中へ入ると暖かいのかと思いきや、さらに寒くて驚いた。
長い長い、氷の床の上はつるつると滑って歩きにくいし、天井を見上げると、氷柱がびっしりと並んでいる。
「落ちてきたら、刺さるね」
「……痛そう」
小さい声で私とレオはそんなことを話す。
「こちらでお待ちください」
案内をしてくれた門番が、部屋の扉を開けてくれた。
中には、氷のシャンデリアがあり、氷の机と椅子が置かれてある。
門番は一礼して立ち去る。
「ぜーんぶ、氷だ」
「うわ……アルル、氷だから、お尻が、冷たいよ」
「本当だ！」
魔法で座布団を出し、その上に私たちは座った。

お父さんが小さく息をつくと、私の方へと体を向ける。
「さっきの名は、黒い魔法使いの六人衆の一人じゃな」
「うん……雰囲気が似ているなって思って思わずつぶやいちゃったの」
「あぁ。周囲の反応が異様じゃったな。うーむ。これは、何かありそうだな。氷の王国は閉鎖的な国。滅多にこちらに情報も来ないのじゃ。……氷結のレレナか。氷の王国出身なのかもしれんな」
私がうなずいた時、部屋の扉がノックされる。
扉が開いて入ってきたのは、見たことがないほどの美しい女性。
白い肌、銀色の瞳と髪。頭の上には、氷の結晶のようにきらめく王冠が輝いている。
薄い雪の結晶をかたどったドレスを身にまとっており、キラキラと光を反射して綺麗だ。
「魔法使いアロン殿とそのお弟子様方。来てくださり感謝する。私は氷の王国の女王、カルトという」
カルト様はそう言い、私たちの目の前のソファへと腰掛ける。
その瞬間、ふわっと雪が舞い、部屋の温度が一気に下がったような気がして身震いする。
「……そのように服を着込んで、暑くないのか？」

カルト様の問いかけに私は首を横に振る。
「あ、いいえ。その、まだ寒いくらい……です」
「……ふう。ほかの国の者は寒がりなのだな」
そう言うと、パチンと指を鳴らす。部屋の温度が少しだけ上がった。
カルト様の周囲だけ、氷の結晶が降り続けている。
「ありがとうございます」
私がそう伝えると、カルト様はうなずき、お父さんの方を向いた。
「見てほしいものがあるのだ。現時点では国民には気づかれておらぬが、これが知られれば……王国は大騒ぎになるだろう」
一体なんだろうと思ってドキドキしていると、カルト様は指をまたパチンと鳴らした。
すると、雪が舞うと共に、机に映像が映し出された。
うねりをあげる長い緑色をしたツル。その大きさは人ほどもあり、その根には葉もちらほらと生えている。うねる姿はまるで蛇のようで、地中へと姿を消した。
私はそれを見て首をこてんとかしげる。
「植物のツル？」

すると、カルト様にギロリとにらまれてしまった。
「氷の王国には、氷の植物が生える。よその国にあるような緑の植物は生えん。これが何を意味しているか、分かるか？」
首を横に振ると、大きくため息をつかれた。
お父さんは繰り返し映し出されるツルをじっと見つめる。
「つまり、この植物が生えた原因をつきとめてほしいということかの？」
カルト様はうなずく。
「そうだ。緑の植物というのは暖かな土地の象徴であり、我らからするとおぞましいものなのだ。そんなものが王国に生えたら国中がパニックになる。だが原因を調べても分からなくてな……確かなのは、黒い魔法使いが関係しているということ。故に、大魔法使いアロン殿であれば原因を究明できるのではないかと思い、手紙を送ったのだ」
その言葉に、お父さんが眉間にシワを寄せる。
「黒い魔法使いが？　その根拠は？」
「……これだ」
少しだけ、出しづらそうに机の上に置かれた黒い手紙。

その瞬間、ぶわりと黒い闇の気配が広がり、背筋がぞわぞわとした。
これは危険だと、危ないぞと頭の中で警笛が鳴る。
それはレオもお父さんも一緒だったのだろう。私たち三人は気づけば杖を取り出して構えていた。
カルト様はそれを見て驚くが、私は緊張して杖を握る手に力が入る。
「たしかに、これは黒い魔法使いからの手紙に、間違いがなさそうじゃな。手紙にかかっている魔法を解いてもかまわぬか？」
カルト様がうなずくと、すかさずお父さんは杖を振る。
「追跡・盗聴の魔法よ消えよ！」
次の瞬間、黒い手紙から黒い煙が噴き出し、そして霧のように消えた。
さっきまでのぞわぞわが消えて、私はほっとする。
すごく怖かったし気持ちが悪かった。
カルト様が驚いている中、私たちは杖を下ろし、座り直す。
お父さんは、危険が去ったことでほっとしたように息をつくと、少し厳しい口調で、カルト様を見据えた。

「話がつつぬけになるところじゃったわい」
「なんだと……そんな」
カルト様は驚いたように声をもらし、目を丸くした後に、ショックを受けたように頭を押さえた。
「手紙を読んでもいいかの？　魔法さえ解いてしまえば、ただの手紙じゃからな」
「……もちろんだ」
お父さんは手紙を開いて読み、それから私とレオにも見せてくれた。

☆☆☆
美しい花が咲く時が来ました。
氷結のレレナより、溶けることのない憎しみを込めて。
☆☆☆

短い手紙。
けれど、その文面からはレレナが氷の王国に憎しみを向けていることが伝わってきた。

カルト様はゆっくりと口を開く。
「氷結のレレナは、十年前、我が国に危機をもたらした黒い魔法使いだ。我が国を恨み……復讐の機会を待っていたのだろう」
「恨みとは？　危機とは？」
「レレナには妹がいた。我が国始まって以来の……寒さに弱い、そなたらのような人種であった。故に、氷の王国では気味悪がられた。そればかりか……我が国に緑の植物を取り込もうとしたのだ。氷の王国に緑など言語道断！」
――ドンッ！
机を勢いよく叩いたカルト様。
私はそれにびくりとする。
怒っているのか、カルト様は強い口調のまま続ける。
「だから！　追放したのだ！　レレナは才能あふれる少女だったのに、そんな妹を持ったがために……バカが！」
一体何があったのだろう。
「……話が見えんな。記憶をのぞいてもかまわんか？」

「やめろ！　それは許さん」
お父さんはため息をつく。
「わしは、悪者を決めようとしているわけではない。事実を見たうえで、今後どうするべきかを考えるために言っておるのじゃ」
「……それは……」
「後ろめたいことがあるのじゃな」
「ッ!?　それは……」
「誰にも言わないと誓おう。大魔法使いアロンの名において。弟子二人もじゃ」
カルト様はちらりと私たちを見てから、ため息をついた。
「分かった……他言無用だぞ」
「あぁ。では、記憶をのぞくぞ」
お父さんが、カルト様の目の前で杖を振る。
「記憶を呼び覚ませ。我らにそれを見せよ」
次の瞬間、私たちの頭の中に、カルト様の記憶が流れ込んできた――

＊＊＊

「レレナよ。氷の王国の女王として命じる。そこをどけ」
名を呼ばれたレレナは、妹を背にかばいながら叫んだ。
「妹のマリアはまだ十歳です！　そんなマリアがどうして国外追放なのですか！」
レレナの後ろで震えるマリア。
それを取り囲んでいるのは氷の王国の騎士たちと女王カルト。
「……では、何故王国を裏切るようなことを？　緑の植物は、我が国には必要ない」
マリアは手に持っていた鉢植えをぎゅっと抱きしめる。
「ご、ごめんなさい……ほかの国から来た商人にもらったんです。でも、でも別に悪さなんてしない普通の植物です！」
「この植物は捨てさせます！　ですから、お許しください」
「ならん」
「何故……女王陛下！　どうかマリアにチャンスを！　まだ十歳の、幼い子です！　この国を追い出されて、どうやって生きていけというのですか！」

カルトは表情を変えずに静かに述べた。
「そこをどけ。どかねば、そなたも共に追放にするぞ」
レレナは唇をかむと、うなずいた。
「分かりました。では、私も妹と共に行きます」
「お、お姉様……」
「いいのよ。マリア。さぁ、行きましょう。大丈夫。私が絶対にあなたを守るから」
二人の会話を聞いて、カルトは眉間にシワを寄せる。
「氷の王国の民が外で生きていけると？　ふふ。バカが。外は氷の王国とは違うのだぞ！暑さにやられて死ぬのがおちだ」
「それでも、妹を一人で放り出すよりはましです」
「そうか。では行くがいいさ。さぁ、王国の外に繋がる扉を出してやろう」
カルトが指をパチンと鳴らすと、目の前に氷の扉が現れる。
レレナは決意を固め、扉を開けてマリアと共に外へと出た。
そして、そこに広がる光景に言葉を失う。
「ここは……!?　待って！　扉を閉めないで！」

「お姉様！」
扉がゆっくりと閉まっていく。
カルトは冷ややかな瞳でじっとレレナを見つめながら告げた。
「王国を危機に陥れた妹をかばうとは……そなたも、我が王国の敵だ。我ら氷の王国の民は、植物が育つような大地では生きていけぬのだ。何故それが分からぬのだ……」
吹雪の山の中に姉妹二人を残したまま、カルトは扉を閉めた。

＊＊＊

まるで悪い夢のような光景だった。
私の手をレオがぎゅっと握る。
カルト様は表情を変えずに静かに言った。
「私は女王だ。王国を脅かす者を許しはしない」
恐ろしくて、怖い人。
王国のためであれば、姉妹を雪山に放り出してもいいと、そう、思っていることを知っ

て、私は胸がぎゅっと苦しくなる。
お父さんがゆっくりと息をつく。
「なるほどな……これは恨まれても仕方があるまい。さて、それで、今度は現状を教えてくれ」
「現在、王国の数か所でこの植物が目撃され……そして、王国の気温が、少しずつ上昇しているのだ。原因を解明してほしい。どうか、この通りだ」
頭を下げるカルト様。
「黒い魔法使いが関わっているならば、我らは力を貸そう……だが、カルト殿。本当に、あの時の選択が正しかったのか……それを今一度、考えてほしい」
「……力を貸してくれること、感謝する」
私はうつむく。
カルト様のしたことは、ひどいと思った。だって、だって……雪山に置き去りにするなんて。
胸が苦しい。
カルト様と別れた後、私たちはこれから滞在する部屋へと案内され、荷解きを済ませた。

「わしは、氷の王国が今どうなっているのかを調べてくる。アルルとレオは街の様子などを確認してきてくれ。異変や噂話、気になることを見つけて後から教えてくれ」
「分かった。お父さん行ってらっしゃい」
「先生、お気をつけて」
お父さんはうなずくと、部屋から出ていく。
「アルル、大丈夫？」
そう尋ねられ、私は深呼吸をして気持ちを切り替える。
「うん。大丈夫。とにかく調べなきゃね」
「そうだね。行こう」
私とレオも、一呼吸おいてから情報を集めるために街へと向かった。
氷の王国はどこへ行っても寒い。
けれど、街の人たちはまるで南国にでもいるかのような服装だ。
その格好を見ているだけでも寒くなってくる。
氷の王国の中にある商店街を二人で並んで歩いていると、自分たちの街とは全然違うことに気がつく。

「レオ見て。氷ジュースだって」
「この寒いのに……」
「食べ物も、冷たいものばかりだ」
「うわぁ。本当だ。それに服屋さんも……寒そうな服ばかりだ」
この国の人たちは、本当に寒さに強いんだな。
そんなことを考えていた時、私は通りを歩く男の人を見て、足を止めた。
「え？」
「どうしたのアルル？」
私は思わず大きな声を出してしまった。
「ロドロ先生!?」
「え？」
私の声に気がついたのだろう。魔法学園で魔法歴史学を教えてくれているロドロ先生が振り返り、こちらに向かって手をあげた。
「おぉ！　アルルさんじゃないか！」
ロドロ先生は私たちのところまで歩いてくると、嬉しそうに笑って続けた。

「いやいや、学園の外で会うとは珍しい！　わしは、少し気になることがあっての、氷の王国に調査に来ていたのじゃ。アルルさんは、偉大なる大魔法使いアロン殿と共にかな？」
私はうなずきながら尋ねる。
「はい！　お父さんと一緒に来ています。調査って、なんの調査ですか？」
ロドロ先生はにっこりと微笑んだ後、声をひそめる。
「氷の王国では緑の植物は育たんというのにの、生えたらしいんじゃよ。だから、それを採取しに来たのじゃ。こんなこと、これまでの歴史ではなかったのでな！」
なるほどと思っていると、ロドロ先生がレオの方へと視線を向ける。
「ちなみに君は？」
「僕はレオナルドといいます。よろしくお願いいたします」
「ふむ。レオナルドさんか。ふむふむ」
魔法学園に、レオはレオナとして女の子の姿で通っていた。けれど、少数の先生にしかそれは伝えられていない。
ロドロ先生は知っているのか知らないのか。その様子からは分からなかった。
「そうだ。あの、ロドロ先生は氷の王国について詳しいですか？」

魔法歴史学の先生だから、せっかくなら何か教えてもらえないかと思ってそう尋ねると、ロドロ先生はふむと言ってから、一軒の店を指さした。
「よければ、お茶でも一杯どうじゃな？　聞きたいことがあるならば教えよう」
「ありがとうございます！」
「なんのなんの。可愛い生徒からの質問じゃ。しっかりと答えなければな」
お店に着く。ロドロ先生がお店の人に頼んで、奥の個室に案内してもらった。
ロドロ先生が杖を振ると、一瞬で部屋の中が暖かくなる。
「ふう。着ている服が重たかった。コートを脱ごうか」
「はい！」
「ありがとうございます」
私たちの向かいに座ったロドロ先生がメニューを手渡す。
「食べたい物があれば注文しよう」
「あ、先生、大丈夫です」
すると、ロドロ先生は笑い声を立てる。
「はっはっは。若者は遠慮をせんでいい。わしはな、金の使い道がほとほとないのじゃ。

だから心配するな。パフェはどうだ？　パフェ。うむ。わしも食べるとしよう」
ロドロ先生はそう言うと、飲み物とパフェを注文してくれる。
先生にご馳走になってもいいのかな？　と思いつつもせっかくのご厚意をありがたく受けることにした。
ただ驚いたのは、届いたパフェが想像以上に大きかったこと。
そして飲み物にも氷がたくさん入っていて、部屋を暖かくしてもらっても寒く感じる。
ロドロ先生も身震いして、魔法で飲み物の紅茶を温かくしてくれた。
私たち三人は、温かな紅茶を飲んで、ほう、と息をついた。
「あったかいね、レオ」
「うん。アルル、体に染みわたっていくようだよ」
「ほっほっほ。たしかになぁ。パフェはうまいが、やはり冷えるからな。さてさて、氷の王国について知りたいと言っていたな」
「「はい！」」
私たちの返事に、ロドロ先生は魔法の杖を振った。
すると空中に地図が現れて、それを杖でさしながらロドロ先生は話し始めた。

「氷の王国は、ほかの国との境界線が明確じゃ。氷の王国にひとたび入れば、肌を刺すような冷たい世界じゃからな。そしてこの王国で生まれた者はその土地の力が影響し、氷の大地でも生きていけると考えられている。だからこそ……氷の王国で生まれた者が外で暮らすことは容易ではない」
「そうなんですね……。だから、カルト様は……」
カルト様がレレナたちを追い出した時のことを私は思い出す。
私はロドロ先生に、気になっていたことを尋ねた。
「あの、ロドロ先生、どうして氷の王国には、普通の植物が生えないんですか？」
「氷の王国には氷の植物が生えるからじゃ。その土地に適した植物しか生えないのは自然の摂理じゃよ」
「なるほど……」
「だからの、氷の王国に緑の植物が生えるのは異常なことなのだ。そして、もし生えると

するならば、それは謎の植物ということ。歴史上すごい発見になるだろう。わしは知らないことを知ることも、集めることも大好きだからの、それを調べに来たのじゃ」
ロドロ先生の探究心はすごい。
夢中になれることがあるって素敵だなぁと私は思った。
「教えてくれてありがとうございます」
「なんのなんの」
私たちはその後、パフェを美味しく食べ終えてからお店を出る。
「さて、わしはもう行くが、何かあれば知らせておくれ」
「はい！　先生にお会いできて嬉しかったです」
「ふふふ。わしもじゃよ」
そう言うと、ロドロ先生は私の頭を大きな手で優しくなでた。
その瞬間、ぞわっとしたものを一瞬感じた気がしたけれど、顔を上げればいつものロドロ先生だ。
なんだろう。
手を振り別れながらも、先ほどのぞわりとした感覚が気になる。

「アルル。氷の王国に生えている緑の植物ってなんなんだろうね」
レオに聞かれて、私は顔をあげて考えた。
「そうだね。どうやって生えたんだろう」
「うーん。緑の植物が生えない場所に、どうやって緑の植物が生えたんだろう」
「そうだねぇ」
私とレオも頭がこんがらがってしまう。
「とにかく街の様子をもう少し見てまわろう」
「そうだね。レオ、寒いから体動かしながら行こう」
「うん！　賛成！」
吐く息が真っ白だ。
鼻も指先も寒さでピリピリとして痛い。
家に帰ったら、ココアの中にマシュマロを落として食べたいな。
そう思いながら路地の角を曲がり、次の通りに出ようとした時のこと。
「きゃー！」
「な、なんだあれは！」

「嘘！　緑色の植物!?」
「逃げろ！」
人々の声が聞こえてきて、私とレオは顔を見合わせる。急いで杖を取り出して、ほうきにまたがると、声のする方へと飛んだ。
人々の合間をすり抜けて飛んでいくと、予想もしていなかった光景が広がっていた。
カルト様の出した映像で見た巨大な緑の植物が街の人たちを襲っていたのだ。
「うそ！」
「なんだあれ！　実際に見ると気持ち悪いな！」
「本当だね！　映像で見たものより、なんだか長い！」
――ズズズズズ。
それはまるで蛇のようで、うねりながらツルを鞭のように地面に打ち付けていた。
太さは木の幹くらいあるし、その長さは家の高さを超える。
人々は一生懸命に逃げているけれど、何人かはツルにからめとられて身動きが取れなくなっている。
まずはあの人たちを助けなければ。

私とレオは杖を構えて魔法を放つ。
「塵と化して消えよ！」
「吹き飛べ！」
けれど、植物はひょいとよけると、こちらに向かって無数のツルを伸ばして攻撃を始めた。
「うわぁっ！　近くにいる人！　逃げてください！」
「僕たちが引き付けていますから！　早く！」
私とレオが叫ぶと、人々は慌てた様子で逃げていく。
「アルル！　僕が攻撃を引き受ける！　その間に、つかまっている人たちをお願い！」
「分かった！」
レオが攻撃を仕掛けてくるツルを一手に引き受けて飛びまわる。
私はその間をすり抜けて、つかまっている人の体に巻き付いているツルを外していく。
そして全員を助けてから、レオに合図を送る。
レオはうなずいて、魔法を放った。
「炎よ！　ツルを燃やせ！」

――ゴウウウ！
次の瞬間、植物は炎に包まれた。
私はレオの横へと飛んでいくと、同じように炎を放つ。
植物はうねりをあげて、地面にダン、ダンと勢いよくツルを打ち付ける。炎を地面にこすりつけて消そうとしているのだろう。
「アルルだめだ！　根元をやらなきゃ」
「うん！　レオ！　あそこだ！」
ツルはいくつも生えているけれど根元は一つ。
私とレオはツルのすきまをかいくぐって、そこを目指して飛ぶ。
それから狙いを定めるとその根元に杖を向けて叫んだ。
「「吹き飛べ！」」
杖から放たれた魔法によって、根元が吹き飛ぶ。
根元を断ち切られたツルは、黒い灰のようになって風に飛ばされて消えていった。
私とレオは息をついて地面に降りると、先ほどまで根元があった場所を見つめる。
そこにはぽっかりと洞窟のように穴が空いている。

立ち読みサンプル
はここまで

「アルル……どう思う？」
じっと穴の中をのぞき込むレオに、私は言葉を返した。
「穴の中へ潜った方がいいと思う」
レオはうなずく。
「そうだよね。うん……アロン先生に報告をしてから、調査へ向かおう」
「それまでは、ここを立ち入り禁止にして、誰も入れないように封印の魔法もかけた方がいいかもしれないね」
「うん」
私とレオは、間違えて人がここへ入らないように封印の魔法をかけると、様子を見に来た人たちに声をかけた。
「私たちは偉大なる大魔法使いアロンの弟子です」
「調査のため、ここはしばらく立ち入り禁止とさせていただきます」
氷の王国の騎士たちも集まり始めた。
私は状況を説明すると、お父さんの元へと一度帰ろうとした。
その時、数人の声が聞こえてくる。